１）活動の背景

1963 年の閣議決定によりスタートした筑波研究学園都市の建設は、1980 年に一応の「概成」を見て、さらに 1985 年に開かれた科学万博前後に都市的な体裁も整った。1987 年には 4 町村が合併、翌年には 1 町が加わり、研究学園都市のまわりを、その約５倍の広大な田園地域が取り囲むつくば市が誕生した。

1997 年、建設事業の中心であった住宅･都市整備公団が、つくば開発事業を清算することとなり、つくばは大きな節目を迎えた。同時に国土庁大都市整備局大都市圏整備局特別整備課も、筑波研究学園都市はほぼ目標を達成したと語った。いよいよつくばのまちづくりは、市と市民に全面的に委ねられることになった。

では、つくばは十分魅力的なまちになっただろうか。つくばの中心地区には、磯崎新設計のつくばセンタービルはじめ、有名建築家の作品が建築博物館のように並んでいる。また公園の１人あたり面積は 9.65 ㎡(2003 年 2 月現在)で他都市のそれを大きく上回っており、しかも公園と公園は計画的にペデストリアンデッキで結ばれている。広い大通りに立ち並ぶ街路樹は、大きく成長してまちに風格を与えている。それでも、「自分たちのまちという感じがしない」「あたたかみがない」「歩く人がいない…」そんな思いを市も、市民も共有していた。しかも、建築後 10 数年を経た建物や広場は老朽化が始まり、敷石はひび割れ、黒ずみ、雑草ははびこって、荒れて見捨てられた雰囲気が広がりつつあった。

一方、右肩上がりの時代につくられた「常磐新線と沿線開発」という計画が、現実のものとなって目前に迫りつつあった。「東京都心とつくばという２大国際情報発信拠点を直結し、沿線を開発する」というコンセプトのもとに、筑波研究学園都市に対し、面積で 4 倍弱、人口５、6 倍の大事業が遂行されようとしている。人口減少、都心回帰の時代と言われながら、始まってしまった事業は止められず、大きな負債と不安、漠然とした期待をはらみながら、工事は急ピッチで進められている。

２）活動の経緯と目標

①市の方針

このような状況の中で、1998 年のつくば国際会議場のオープンを前に、市内農家生産の花を、市民の手で植えて、中心地区を活性化し、国内外からのお客様を温かく迎えようという考えが市から出された。それを、行政が直接ではなく、市民を中心に、産官学が協力して進めていこうというのである。

②花と緑のまちづくり活動

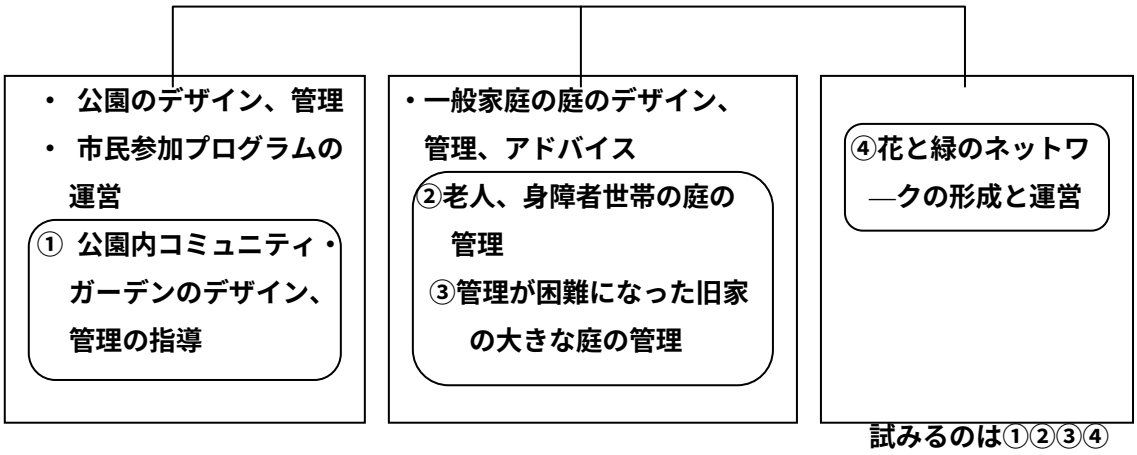
市民の間には、もともと様々な緑に関わる活動があったが、その一つに女性の企画グループ暮しの企画舎が始めた「女性庭師講座」があった。1991 年に、造園会社の後援を受けてつくばで始まったこの講座は、大きな反響を呼び、水戸、取手など各地で、市民や造園会社の要請を受けて数回にわたって行われた。1993 年に講座の受講生が集まって「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会をつくり、ハウジングアンドコミュニティ財団の

第一回住まいとコミュニティづくり活動助成を受けて、講座は継続的な活動へと発展した。やがて参加者の中からは、技能を身に付けて、造園施工管理技士、造園技能士、樹木医などの資格を取得して、自ら造園業を営んだり、造園会社に就職したりするプロの道にはいる人たちがあらわれた。一方、自分たちがつくった花の庭にお年寄りを招いたり、花苗の交換会をしたりするボランティアの輪も広がり、この両方の力を地域に生かすために、「花と緑のまちづくりセンター」の構想が活動から生まれた。

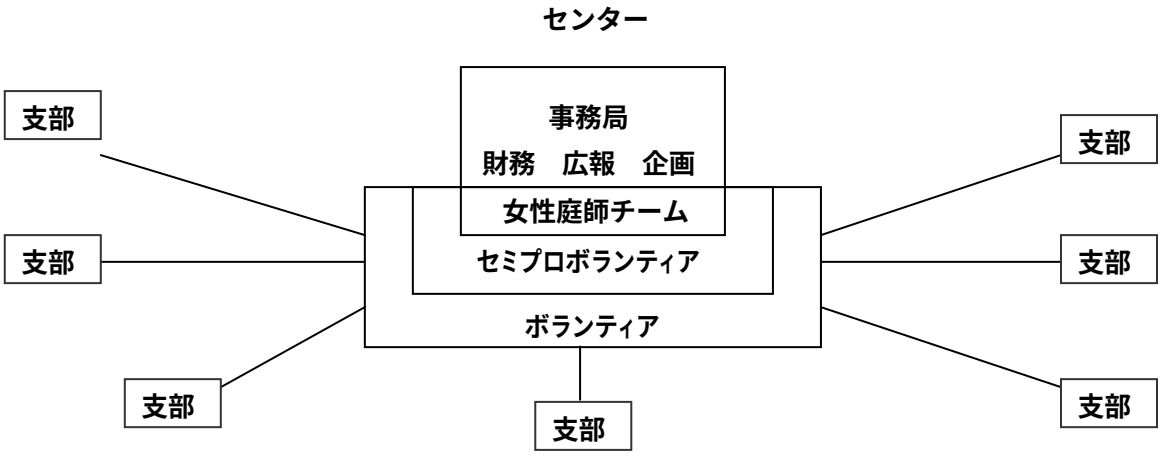
図１　花と緑のまちづくりセンター

花と緑のまちづくりセンター

□業務内容



□組織イメージ



③TUG の誕生

しかし、この構想は実現することなく、数年間にわたって市の空き地を借りてのボランティア活動が続いていた。そこへ、市の、花による中心市街地活性化の構想が生まれ、「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会の活動を支えてきた暮しの企画舎に相談が持ち込まれた。そこで生まれたのが、次の図のようなつくばアーバンガーデニング実行委員会(略称 TUG)である。

④TUG の組織

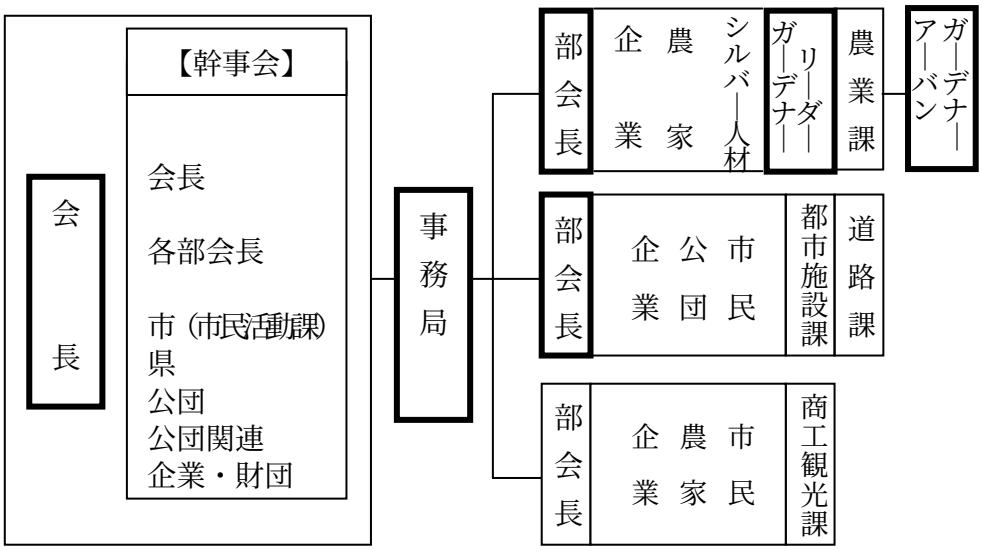


図２TUG の組織図

■ＴＵＧをささえる強い味方

アーバンガーデナー

7 NIN NO SAMURAI

◆ＴＵＧ事業にとって、花うえとその後の管理は最も重要な活動の一つです。市民の先頭にたって花うえをし、花壇を常に美しく保つために管理していくのがアーバンガーデナーの仕事。

◆現在アーバンガーデナーは7人。ＴＵＧのために素敵なユニフォームを揃えました。それぞれガーデニングに長年携わり、プロとして活躍する力を備えた方々です。

◆皆さんも、アーバンガーデナーをめざしてみませんか？

図３　TUG をささえる強い見方(新聞記事)

その特徴は、

・産官学民が幅広い協力体制をとっていること
・市も窓口は市民活動課だが、関係する各課が実行委員となって横断的な体制を取っていること
・「女性庭師講座」、「花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で」委員会から育った「女性庭師」たちが「アーバンガーデナー」となり、市民の立場に立つ専門家と

して、有償で花と緑の管理の中核を担っていることなどである。

アーバンガーデナーが責任を持って、花を選定し、農家に育苗を依頼し、花壇をデザインし、市民ボランティアを指導して花植えをし、その後も市民ボランティアと共に手入れをしていく。そして、暮しの企画舎が担うことになった事務局も、実行委員会の意見を反映させつつ､有償で事業を推進していく｡花と緑のまちづくりセンターの一部が、形を変えて実現したと言える。

⑤TUG の目的

市から要請された目標は、次のとおりであった。

○つくばの玄関口であるセンター地区をセンスのよい花で飾り、訪れる人につくば市民の温かい心を伝える。

○園芸農業の振興。

○都市住民と農村住民の交流。

○市民参加の象徴的事業とする。

上記を踏まえて、TUG は次の基本方針を打ち出した。

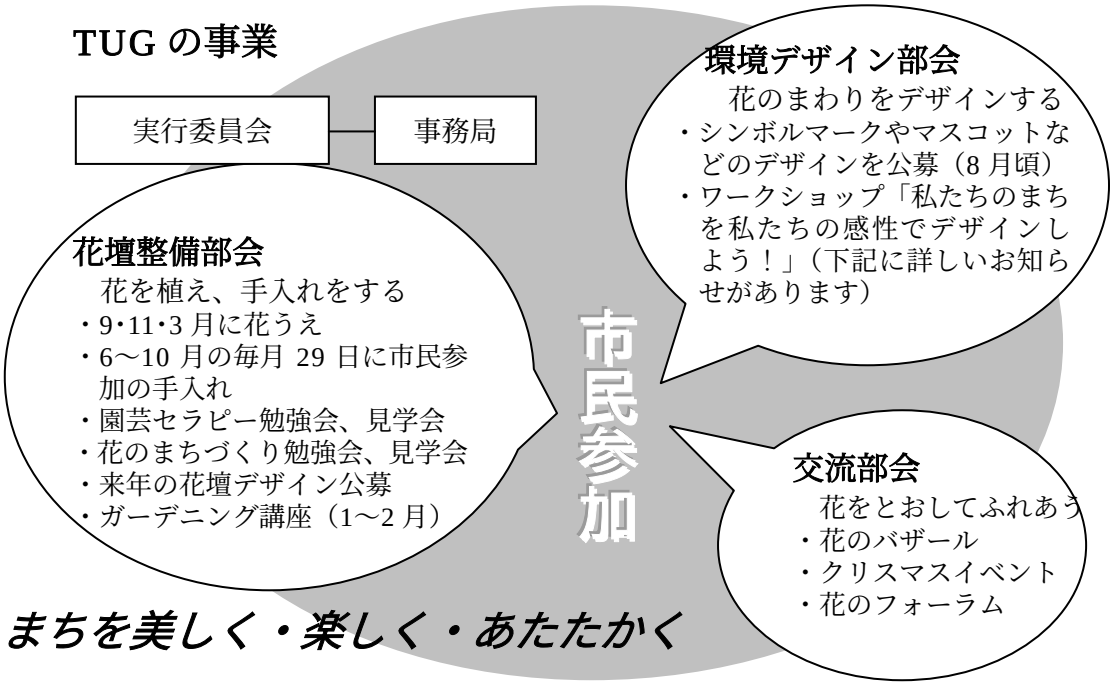
○市民が中心となって、花のあるまちを育むことで、まちづくりの心を育て、つくばらしさを創生していく。

○市民をベースに、産・官・学が協力して推進することで、一体感のある美しいまちをつくる。

○花の魅力をとおして、つくばに住む人、訪れる人、すべての人々の交流をはかる。

３）活動の内容

その基本方針のもとに、図のような活動を展開している。



具体的には次のとおりである。

①花壇整備部会

ａ．花壇整備

毎年拡大して 5 年目の 2002 年度は計 3500 平米の花壇、プランターに、花を植え管理している。年 4 回の「みんなで花をうえよう！」と週 1 回の手入れ、春～秋は毎日、冬は週 2 回程度の潅水作業がある。アーバンガーデナーは、現在 10 名、潅水作業員は 4 名のシルバー世代の男性と筑波大学の学生グループが交代で行っている。

2 月 23 日に、今年最初の「みんなで花をうえよう！」を実施した。つくばセンタービルペデストリアンデッキの 46 本のケヤキの根元に、パンジーを植えた。

ｂ．園芸セラピー勉強会

2001 年に、高齢者や障害者もふくめて、すべての人が園芸を楽しむことができるユニバーサルデザインの「いやしの庭」を市民参加でデザインし、(財)都市緑化基金等が主催する緑のデザイン賞に応募、入賞して、副賞の緑化助成により、「松見公園」に建設した。土地は市のもので、上物は TUG が所有しているという珍しいケースである。

「松見公園」は市内で最も人気のある公園の一つだが、造られてから 20 年以上になり老朽化が進んでいる。展望塔のある建物にテナントとしてはいっていた喫茶店も今は撤退し、公園を囲むコンクリートの造形物に埋め込まれたライトも切れたままになっている。「いやしの庭」の完成以来、「自閉症青年の自立を助ける会」が、「いやしの庭」の手入れを活動の中心とするようになり、建物も拠点として活用している。

いやしの庭に春の花を植える

コンクリートの造形物は、市内の中学生の石彫作品の展示スペースとして使われ、息を吹き返した。隣の病院で療養中の患者さんなど、車椅子の人々もしばしば庭を訪れ花や緑を楽しんでいる。

2002 年度は、この庭をさらに活用する方法を学ぼうと 1 年間にわたって「いやしのガーデナー講座」を開講した。1～3 月は、その 3 学期にあたり、1 月 18 日、2 月 15 日、3 月 15 日と講座を行い、園芸療法のプログラムの立て方を学び、3 月にはお年寄りを対象とするプログラムを実際に行った。

シニアガーデンにて

②環境デザイン部会

花の似合うまちにふさわしい「まちの家具」を市民の感覚でデザイン、制作する。1～3 月は、「いやしの庭」の看板兼掲示板のデザインと制作を行った。公園を訪れる一般の人々に、この庭が、誰が、どんな目的のために、どのようにして作ったのかをわかってもらうことと、高齢者や障害者と花と緑を通して交流するイベントへの参加の呼びかけを掲示することが目的である。

③交流部会

暮れに「つくば 100 本のクリスマスツリー」という一大イベントを行っているので、1～2 月は小休止の時期だが、3 月には、毎年、活動のまとめとして「花のフォーラム」を開催し、活動の報告と講師を迎えての講演会を行う。今年は 5 年目の節目なので、講演会は行わず、これまでに TUG に関わった人々に声をかけ、いっしょに「いやしの庭」に春の花を植え、その後一品もちよりのなごやかなパーティーを開き、TUG のこれまでと今後について意見を交換した。

４）TUG 活動 5 年間の実績検証

TUG 発足時に、実行委員会として 5 年間の事業を行い、その間補助金を拠出するという議会に対する市の説明があったところから、5 年間を過ぎた後は、別の形での事業の継続が想定されていた。NPO 法人となり、これまで行ってきたいくつかの事業について、市が委託するという形を取りたいとの市の要望があり、2003 年度からは再出発をすることとなっている。

そこで、プロカメラマンによる 5000 枚の記録写真、スタッフによる 3000 枚の記録写真、資料を整理し、5 年間の実績を振り返り、実績を検証すると共に、パワーポイント(別添)にまとめることにした。次に実績についての議論のあらましを記載する。

①TUG は目標をクリアしたか

〇センター地区を美しくセンスのよい花で飾り、訪れる人に市民の温かい心を伝える。

・発足 2 年目の 1999 年、全国花のまちづくりコンクール団体部門最優秀となり、建設大臣賞を受けた。その際、「空間構成が巧みで、周囲の建物とよく調和したデザイン」が評価された。

・つくば市社会福祉協議会の「つくばまちづくりコンクール…やさしいまちってどんなまち？」においても、子供たちの作文や絵に、「やさしい風景」として取り上げられることが多い。

以上から、センター地区が花で美しくなり、市民の温かい心が伝わる雰囲気が生まれたと言える。

〇園芸農業の振興／都市住民と農村住民の交流

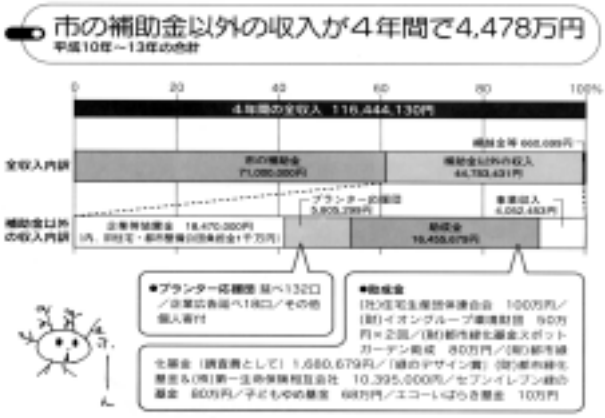
・つくば市花卉生産者連絡協議会を通じて、できるかぎり地元で生産される苗を植えている。毎回の花植えの数ヶ月前に、つくば市花卉生産者連絡協議会、農業改良普及センター、アーバンガーデナーリーダー、TUG 事務局が話し合いの場を持ち、どんな苗を何株、いくらで、誰が生産するかを決め、花植え当日に、それぞれの農家が、TUG が指定した場所に届けるという方式がとられている。

・公共の場所に、毎年約 5 万株、約 400 万円の地元生産の苗が植えられている。TUG 活動前は、花の量がずっと少なかった。それが地元産であることもなく、農家は市場に出荷していたし、業者は市場から仕入れていた。その点では非常に画期的であった。

・農家の側からは、普段作り慣れている一般的な花苗を大量に買ってほしいという希望があった。

これまで作ったことのない苗を２００株、３００株程度の単位で作らされるのは効率が悪いという不満が出た。
・TUG の側では、農家に、これから人気が出ると思われる目新しい花にチャレンジしてもらいたい希望があった。
・TUG の側では、市場を通さないこと、注文生産であることから、市場価格より安い値段で取引したかったが、農家としては､少しでも高く売りたがった。
・意見の一致しない点はあったものの、真剣なやりとりを通してお互いを理解するという意味で、有意義だった。
・取引以外にも、「寄せ植えでまちを飾ろう」などの企画では、市民がバスで数軒の農家をまわって思い思いの苗を買い、寄せ植えをつくって、市民手作りのプランターが数ヶ月間センターを飾るという試みをし、市民につくばの花に親しみを持ってもらう機会とした。
・センターに植えた花が盛りになると、農家の人たちが見に来てくれ、自分たちの育てた花がセンターを美しくしていることを大変喜んでくれた。
　以上から、課題はあるものの、これまでになかった交流が生まれていると言える。
〇市民参加の象徴的事業になったか
・TUG は、個人が自由意志で参加することが原則なので、数百人､数千人の市民が一斉に花を植えるという光景は見られない。しかし、毎回の花植えには平均４０名が集まり、和気藹々と作業が進められる状況が定着している。幼児から高齢者まで、また学生から主婦まで､幅広い参加がある。
・「つくば 100 本のクリスマスツリー」には、小学生を中心に多く（2002 年度 759 点）の応募があり、そのうち約 60 点が選ばれて､ツリーづくりに参加する。子供が応募して、つくるのは家族ぐるみなので、「まちづくり」などに特に関心のない、一般の人たちを誘い込む仕掛けとなっている。残りの 40 本も、福祉団体などのツリーで、1 本 1 本に数人から数十人の人々が関わっている。作品を作るというだけでなく、公共の場を、自分たちの作品で飾り、賑やかにすることで、まちへの帰属意識が生まれる。「住んで 20 年になるが、初めて住民という意識を持てた」という感想が、今年の参加者のアンケートに見られた。
　以上から、特にこの点に関しては、十分な効果があったと考える。
②費用対効果は
　4 年目の TUG ニュースに掲載した 2001 年度の年次報告と 4 年間を通しての会計報告である。
・1 年間の会計について見ると、2300 万の事業費は市民活動としては大きく見えるが、有償スタッフ 61 人の経費と家賃、光熱費等の経常経費が含まれることを考えれば、決して余裕のある額ではない。
・有償スタッフのほか、無償のボランティアが協力してくれているので、実際にはもっと大きな事業を行っている。
・さらに、4 年間に市が拠出した補助金は 7100 万円と巨額ではあるが、TUG がその他の

方法で集めた資金も 4478 万円にのぼり、公共の場作りや市民活動のためにそれだけの額が使われたことは、つくば市にとって大きなプラスであったと考える。



５）TUG の今後の展開について

①プラットホームの開設

初めに述べたように、つくば市には、筑波研究学園都市の４、５倍という、常識的に考えれば不可能と思われる大規模な開発の予定がある。この計画をできる限りよい方向に導くためには、つくばの魅力である緑と広々とした空間を最大限に活かすことが鍵となる。

緑と空間が魅力であるためには、適切な手入れが必要であり、そのために、TUG の体験が、参考になると思われるところから、「まちづくりプラットホーム」を開設し、今後の緑の管理のあり方について、意見を収集した。

イメージを持ちやすいように、住宅地〔庭・住宅地内の共有地・児童公園〕、公共地〔公園･道路〕、公共･民間地〔施設周辺･駅前広場〕、その他〔学校の庭・保健保安林・商店街等〕に分けて、それぞれについて、以下のような質問をした。

○どんなふうに使われるとよいか

○どんなふうに管理するとよいか

○誰が管理するか

○誰が費用を負担するか

その結果、多くの意見､アイデアが集まった（別添）。

代表的な意見「19 世紀までの日本列島に生きた地域管理の知恵を発掘、再評価してみよう。例えば、入会地の管理などはみごとな先例。それを土地公有化の中で、地域の連帯すら見失って、官任せの慣れを身につけてしまった」に見られるように、住む人が.自分の家だけでなく、地域を守り育てることに、主体的に関わっていくべきだという認識を、多くの人が持っていることがわかった。またそれを賄う費用についても、「“ごちボラ”システムつくば版（たとえばつくばの物産を購入すると５%は指定団体に寄付される）」など、新しいアイデアも数多く提案された。

その中から、アメリカの住宅地に見られるホームオーナーズアソシエーション（HOA）への関心が生まれ、HOA 研究の第一人者である明海大学助教授の齊藤広子氏を招いてのワークショップを開催することになった。

②ワークショップ開催

日時：3 月 14 日午後 5 時半～8 時半

場所：都市公団会議室

参加者：一般市民、筑波大教員、学生、つくば市新線推進室、茨城県企画部新線沿線整備課、都市公団つくば整備部事業計画課など沿線開発関係者計 35 名

内容：

1．つくばアーバンガーデニング 5 年間の報告

2．HOA 研究の第一人者齊藤広子氏による講演

1．そもそもアメリカでは？
・クラスター開発やＰＵＤ
・付加価値をつける⇒地域制と宅地分割規制とカベナント
・アメリカＨＯＡの発祥の地、ラドバーンでは？
2．日本の場合は？
〇個別事例
・グリーンタウン高尾
・グリーンテラス城山
・大分パークシティ
・横浜緑園都市
〇全体的傾向

ＨＯＡは、単純に言うと、マンションの管理組合を平たくしたような組織。そこに住む全員が参加し、集まって住むメリットを生かして、住民自身が、主体的に、質の高い、多様性に富む住環境をつくっていくための組織であること。阪神淡路大震災の際、あらためて、近隣の重要性が意識されて、日本でもＨＯＡのある新しい住宅地のすばらしい例が増えつつある。

3．筑波大学外国人教師ブライアン･ベーカー氏によるアメリカのＨＯＡについての考察

・訴訟好きな社会であるアメリカにおいては、ＨＯＡは悪評が高い。もっと協調性のある日本のような社会では、ＨＯＡは、コミュニティにサービスを提供したり、コミュニティの質を高めたりする役割を果たす、よりよいものとなる可能性がある。

・ＨＯＡのルールや禁止事項は、単純で、理解しやすく、そのコミュニティに即していなくてはならない。

・個人の権利を制限することなしに、コミュニティの規律を生むこととの間に調和

が保たれることが重要である。本来の目的である、住む人みんなによって維持されるコモンスペース（建物であれ、風景であれ）のある質の高いコミュニティは、住む人にそこに住むことの心地よさを感じさせる。

4. 筑波大学助教授渡和由氏による「セルスケープ」についての考察

「セルスケープ」は普通、「売らんかな」の姿勢の悪い風景の意味に使われるが、逆に良質なランドスケープを「セルスケープ」と呼んでみる。

米国住宅地にみられるランドスケープ―セルスケープの役割と重要性は顕著である。その手法は、以下のとおり。

・ランドスケープによるアメニティと眺望の明確化
・地域、地区、区画レベルでの特徴づけと多様化
・公園を視覚的焦点とし、顕在化する配置と道路計画
・まちなみを親密化する建築計画と外観･室内計画
・商業と住宅がオープンスペースに面する敷地計画
・ライフスタイルの混在と複合化に適した地域計画
・自然享受と農や花と共存する管理運営組織の設置

「セルスケープ」の概念は、わが国でも良好な生活感と社会資本形成のために適用可能である。

５．意見交換

ＨＯＡを、これからの住宅地建設に生かして行きたいという意見が多く出された。また、ＨＯＡとＴＵＧの組み合わせによるまちの管理、あるいは、地方自治体とＨＯＡとの関係をどのように築いていくかが課題などの意見もあった。

③まとめ

プラットホームとワークショップから集まった声、学んだことを踏まえ、TUG は NPO つくばアーバンガーデニングとして、新しい歩みを始めなくてはならない。住む人の組織であるＨＯＡとＴＵＧは本来異なるものだが、共通する点も多く、「住む人」をまちじゅうに広げたのが TUG であるとも言える。

まちの緑について、

･誰が、どの部分を、どのように、担うのか。
･お金を出すのが誰か。
･労力を提供するのは誰か
･マネジメントをするのは誰か

常に、これらを問い、明らかにしながら、活動を進めていくのが、まちを市民のものにしていく上で必要なことだと考える。

６）活動のポイント

・活動の人材・・・普段の活動（花植えなど）については、TUG の活動に参加しているボランティア。市報、地域情報紙にも、イベントの案内は掲載する。TUG ニュース、花守りさん、ホームページにも掲載。

・・・プラットホームについては、筑波大学の学生の参加がかなりあった。これは、TUG の活動に参加した学生の中から、市民活動と学生を結び付けたいという声があがり、昨年むすびつくバというネットワークが生まれたことがきっかけになり、学生がつくった「むすびつくバムック」という情報誌が生まれるなどして、NPO に出入りする学生が増えたことによる。学生のエネルギーは市民活動にとって貴重で、つくばにとって良い状況が生まれつつある。

・・・ワークショップについては、新線の事業に携わる関係者が遠方からも足を運んでくれた。これも、市民、学者、事業者が共に考えていこうという雰囲気が生まれていることの証である。

・活動のための資金調達

・・・TUG は様々な方法で資金を調達している。2001 年度会計報告を参照されたい。

・活動のネットワーク・支援

・・・前述のむすびつくバムックや、2001 年につくばで開催された新田園都市国際会議をきっかけに生まれた「新田園都市を考え・語り・行動する会」さらにそこから生まれた「グループつくばＷＩＳ」など、自分たちでつくってきたネットワークに支えられている。

グループつくばＷＩＳは、2002 年秋「売れるつくばワークショップ」を開催、そこから出てきた市民のアイデアを、市、公団、県に出前で持ちまわった。そのことから、市民と事業者との交流を生むきっかけとなり、今後も協働の動きが活発になることが期待される。